

描かれた春と子どもの存在

いわや さぎなみ はいがさんびつ
巖谷小波「俳画散筆」

(草津市蔵・中神コレクション)



巖谷小波（1870～1933）は、明治から大正にかけて活躍した児童文学者です。本名を季雄(すえお)といい、筆名の小波は近江の枕詞である細波が由来であると伝えられています。小波は東京で生まれましたが、父・一六(いちろく)や小波の妻・勇子(ゆうこ)の生家が甲賀郡水口にあったことから、近江とゆかりの深い人物でした。代表作『こがね丸』はベストセラーとなり、その後も多くの作品を世に出し、近代児童文学の礎を築きました。小波の才能は多岐にわたり、「富士は日本一の山」という歌詞で締めくくられる唱歌『ふじの山（富士山）』の作詞を行ったことでも、その名を知られています。また、官吏を勤め書家としても著名であった父の影響を受けた小波は、作中に自筆で句を添えるなど、俳人としても優れた作品を多く残しました。

「俳画散筆」には、小波が自ら描いたとされる絵とともに、自作の句が添えられています。この作品は絵だけを見ると、子どもの帽子に桜の花びらがひらひらと舞い落ちる、何気ない春の暖かな日常の風景を描いているように感じます。しかし、「潔くふもと(に)散りし桜かな」という句を読むと、帽子を山に見立て、ふもとに桜が舞い落ちる、春の山の景色を連想させます。ここに、小波の豊かな想像力と表現力を垣間見ることができます。

また、描かれた3つの帽子は、それぞれ小波の3人の娘を表していると考えられ、子を思う親の柔和な心とともに、暖かな春の訪れを感じさせる作品となっています。同時期、評論家・小説家として活躍した内田魯庵(うちだろあん)に、「全文壇を通じて第一の才人」と評された小波にとって、子どもの存在は特別なものであったことが作品を通して感じられます。

(令和3年2月・草津宿本陣 学芸員 小島美紅)